

iPod を使った日本語教育： Learning beyond the Classroom with iPods

黒川直子(Naoko Kurokawa)
Duke University
kurokawa@duke.edu

[要旨]

本稿はデューク大学で行っている Duke Digital Initiative プロジェクトの一環として iPod をカリキュラムに取り入れた日本語の授業の実践報告である。デューク大学では 2004 年に新入生全員に iPod を無償配布して以来、携帯型デジタル音楽プレイヤーの教育分野における応用の可能性を探り、様々な試みを行ってきた。日本語プログラムにおいても 2006 年より中級レベル、2007 年より全レベルのコースにおいてビデオ機能付き iPod が活用されている。本稿では中級のコースにおける iPod 及びコースマネージメント・ソフトウェア iTunes U の使用を報告し、その効果をアンケート調査の結果とともに考察した。

[キーワード]

iPod iTunes U ポッドキャスト デジタル化 自律学習

1. はじめに

iPod は 2001 年にアップル社より発売されて以来携帯型デジタル音楽プレイヤーの市場において圧倒的なシェアを確保し続けているが、大容量のデータをどこにでも容易に持ち運びができるという利便性は教育分野においてもメリットが大きく、その可能性が注目されている。デューク大学では 2004 年に新入生全員に無償で iPod を配布して以来 Duke Digital Initiative というプロジェクトを推進しており、iPod を始めとするデジタル技術がいかに教育分野に応用できるか可能性を探り、様々な試みを行ってきた。プロジェクト施行以来ソフト面及びハード面でのインフラ整備を進め、2007 年 3 月現在では”iPod Course”として認定されたコースに履修登録している学生は iPod の貸し出しを受けるか割引価格で購入するかの選択が与えられている。*1 現在デュークでは、語学や音楽を始め人文・社会科学、理工系に亘る 70 を超えるコースにおいて iPod が使用されている (Belanger, 2005; Belanger, Earp & O'brien, 2006)。

日本語プログラムにおいては 2006 年春に 3 年次コースにおいて iPod を導入し、2007 年 3 月現在では全レベルのコースにおいて第五世代のビデオ機能及び録音用マイクロフォン付きの iPod が使用されている。本稿では 3 年次のコースにおいて iPod 及びコースマネージメント・ソフトウェアの iTunes U をどのようにカリキュラムに取り込んだかを報告し、その有効性をアンケートの結果を中心に考察する。

2. iPod を使用した活動

本稿で報告する 3 年次のコースは中級レベルで、教科書は三浦・マグロインの『An Integrated Approach to Intermediate Japanese: 中級の日本語』の後半を使用している。学生の人数は学期により異なるが通常 8 人から 15 人程度で、語学運用能力は ACTFL OPI の基準で中級の上程度の学生が大半を占める。

2. 1. 学生による使用

以下 2006 年春、秋、2007 年春の三学期間にかけて、学生が iPod をどのように使用したか教室内外での作業例を報告する。

(1) 教材の聞き取り：

教科書の会話・聞き取り練習や教師の作成した聞き取り教材をコースサイトからダウンロードし、教室外で聞く作業を行った。尚、教材の詳細については次項の「教師による使用」で説明する。

(2) 会話練習と自己評価：

学期中全ての学生が二回ずつ TA と一対一の会話練習を行い、各回約 20 分の会話を iPod に録音した。その後、会話の録音を聞き、教師が作成したシートの基準に従い自らの発話の自己評価を行った。評価の基準は文法や語彙使用の適切性に加え、積極性やあいづち等を含むインターアクションの自然さ等、語用論的能力及びストラテジーに対する気づきを促すことを目的として設定された。録音ファイルはデータベース化し、教師がモニターした。

(3) ポッドキャストの聞き取り及び発表：

学期中各自が選んだ日本語のポッドキャスト*2の番組を定期的に視聴し、教室外で生の日本語を聞く作業を行った。その上で番組の内容や面白いと感じる点などをまとめ、教室内で各自 5 分程度の発表を行った。その際発表する学生は iPod をプロジェクターに接続し、番組の一部を教室で再生した。発表後は使った番組のファイルを iTunes U にアップロードし、後にクラス全員が視聴できるようにした。また、毎回授業開始前には教師が持参した iPod でポッドキャストのビデオによるニュース番組を視聴した。

(4) インタビュー・プロジェクト：

コースの期末プロジェクトとして、各自興味のあるテーマについて調査し地域の日本語母語話者に 20-30 分程度のインタビューを行った。各自後に iPod でインタビューの録音を聞いた上で要約と感想を書き、その内容を盛り込んだ研究発表を行った。

(5) スピーチ：

毎年当大学で開催されるスピーチコンテストの準備として、各自 iPod で録音したスピーチの音声ファイルを事前に提出し、発音・イントネーション・ポーズの入れ方等教師が与えたフィードバックを元に発表の練習をした。コンテストの代表に選ばれた学生は、教師の朗読したスピーチを iPod で聞きながら練習し、発表に備えた。

(6) ドラマ制作準備：

ドラマ（短編映画）制作プロジェクトの準備として、撮影前にグループでスクリプトを朗読し、音声ファイルを提出した。教師による発音・イントネーション等のチェックを受けた上で、ビデオカメラで撮影を行った。

2. 2 教師による使用

次に教師が教材作成や採点等に iPod をどのように使用したか報告する。

(1) デジタル教材の作成・アップロード：

学生が音声・映像ファイルを iPod に取り込むためには、教師はデジタル化したファイルを blackboard や iTunes U などのコースサイトに載せておく必要がある。教科書の聞き取り教材については出版社に許可を得た上で*3 テープをデジタル化し、アップロードを行った。また読み物の音読等、教師の録音による教材も作成した。その他、テレビの対談番組、ドラマ、ドキュメンタリー、CALPER の教材バンク*4 等より集めた短いビデオクリップを編集し、教科書の学習内容に合わせて動画を iPod で視聴する聞き取り教材を作成し、mp4 形式でアップロードした。

(2) 音声ファイルの採点：

前述の通り学生には音声ファイルを提出させる課題を多く与えたが、教師はファイルを聞いた上で発音やイントネーションを中心になるべく細かいフィードバックを与えるよう心がけた。インタビューの録音は学生が提出した要約と録音の内容を照らし合わせ、相手の発話を正確に理解していないと思われる部分については録音を聞きなおすよう指導する一方、あいづちや聞き返しのストラテジーなどの点についてもフィードバックを与えた。

(3) 教室内での使用

教室内では、ポッドキャストや聞き取り教材を取り込んだ iPod をプロジェクターに接続して再生を行ったり、学生の口頭発表やスピーチを iPod で録音したりした。その他、口答試験の記録・採点にも iPod を使用した。

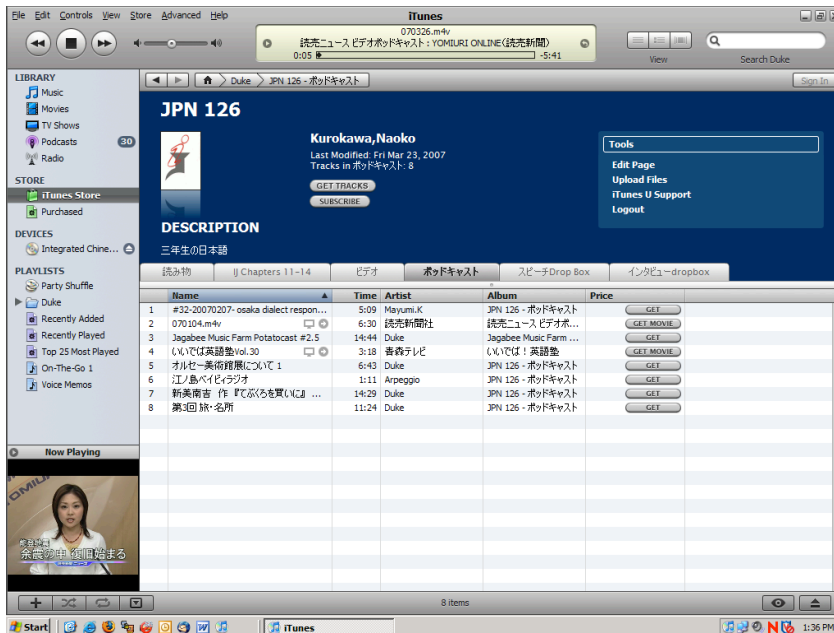


図 1：iTunes U (デューク大学 JPN126)

3. デジタルファイルの管理

デューク大学では blackboard と合わせ、iPod Course を担当する教師とそのコースを履修している学生に iTunes U へのアクセスが与えられている。筆者の教えているコースでは 2006 年秋以降は音声・映像ファイルの提出・取り込みは主に iTunes U を使用し、教師がその管理を行った。

iTunes U はアップル社が開発した音楽配信ソフトウェア iTunes の教育機関版であり、2006 年よりデュークやスタンフォード等の大学で試験的な使用が行われてきた。従来使われていたコースマネージメント・ソフトに比べ容量が大きく、音声・映像ファイルを iPod に取り込みやすいという長所がある。図 1 の通りフォーマットは iTunes Store と類似しているが、異なる点は管理者である教師がデジタルファイルを整理できる機能である。教師はタブごとに学生のアクセスを Drop Box、Shared、Download、No Access の四つより選択できる。筆者の教えたコースではスピーチやインタビューの音声ファイルは提出のみの Drop Box、聞き取り教材の取り込みは Download、学生が発表に使ったポッドキャストのファイルやグループプロジェクトで制作した短編映画などはアップロードと同時にクラス全員が取り込み可能な Shared と、用途に合わせてアクセスレベルを設定した。

4. 考察

上記の通り過去三学期間に亘り iPod/iTunes U を取り入れた活動を行ってきたが、語学のカリキュラムにこのようなテクノロジーを取り込むことにどのような意義があるのか、学生のアンケート調査の結果を中心に考察したい。アンケートは 2006 年春・秋それぞれの学期末に、コースを履修した 21 人の学生を対象に行った。

まず、iPod が日本語学習の役に立ったかどうかという質問には 71.4% が役に立ったと答えた。その理由として全員がいつでもどこでも日本語の視聴ができる利便性を挙げ、多くの学生がキャンパスの移動中やジムで運動をしながら日本語を聞いたと回答した。また、自分の声を録音することが役に立ったという回答や、iPod によって教材を聞きながら発音の練習をすることが容易になったという回答もあった。次に iPod によって日本語を聞く時間が増えたかどうかという質問には、81% の学生が増えたと回答した。一方で iPod を使用する必要性を感じなかったという学生もいたが、その理由としてデューク大学では iPod 導入以前より教材のオンライン化が進んでおり blackboard からのアクセスも提供していることや、キャンパス内のワイヤレス環境が整備されていることなどが考えられる。

iTunes U については本格的な使用を開始して間もないため本稿執筆の段階では学生の評価は不明であるが、教師の観点ではデジタルファイルの整理がしやすく、アクセスの設定が行いやすい等の利点がある一方、ファイル名を明確にしない限り誰がアップロードしたか分かりにくい点や、時にシステムが上手く稼働しない点等、開発途上故の課題も残されているように思われる。いずれにせよ、iPod/iTunes U の導入により音声ファイルをデジタル化して保存したり、学生や他の教師とのファイルの共有が容易になったりしたことは業務効率化にもつながり、教師の立場からも利点が多かった。また iPod/iTunes U の使用により、従来教室内での修正が行いにくかった発音・イントネーション等、音声面のきめ細かいフィードバックが与えられるようになったことも指導上有益であった。

以上の点や大多数の学生が肯定的な評価をしていることを鑑みると、iPod の使用は学習者・教師双方にメリットがあり、導入には一定の効果があつたと考えてよいだろう。注目し

たいのは、多くの学生が聞き取り教材に加え日本語のポッドキャストや歌を自主的にダウンロードして視聴していたという点である。Computer Assisted Language Learning (CALL) と自律学習の関連性については大木 (2005) や Wager (2006) 等過去に多くの研究がなされているが、iPod についても学習における自律性を促す効果があると考えられる。日本語のインプットが限られている JFL 環境において上級レベルに到達するには教室外で生の日本語に触れる機会を増やしていくことが不可欠であるが、iPod は与えられた課題をこなす段階を超えて自律的学習者へ移行する中級学習者への支援ツールとして特に有効ではないかと思われる。中でもポッドキャストは興味のあるトピックについて定期的に *comprehensible input* を増やしていくために最適な方法であり、今後より多様な番組が配信され、学習者の選択肢が広がっていくことが期待される。*5

ナショナル・スタンダードズ (National Standards in Foreign Language Education, 1999) の観点から考えても iPod を始めとするテクノロジーは意義があるものと思われる。ある学生はポッドキャストによる "language and cultural exposure" が学習に役立ったと答えたが、教室内の活動を超越して言語・文化に触れる機会を持つことは特にスタンダードズのゴール、5C の一つである *Communities* の達成につながるものと思われる。インタビュー・プロジェクト等を通じ学んだ日本語を教室外の地域社会で使用したり (5.1 *School and Community*)、最新のメディアの情報を取り入れて教室外で生の日本語を楽しんだり (5.2 *Lifelong Learning*)、iPod の可動性により日本語学習の場を無限に広げることができる。当然ながらこれらのテクノロジーのみによって全てのゴールを達成することはできないが、既存の教授法と組み合わせることでより幅のある活動が可能になり、学習者の言語・文化習得を促進することができるだろう。よって、iPod は従来の教室の枠を超えた学習を可能にするツールとして語学教育には利点が多く、今後より多くの学習者が日本語の習得に役立てていくことが期待される。

5. おわりに

以上、デューク大学における iPod プロジェクトの現状と iPod・iTunes U を取り入れた中級日本語コースのカリキュラムを報告した。言うまでもなく本稿で紹介した活動は iPod の使用例の一つに過ぎず、教師や学習者のアイデア次第でこれら以外にも様々な使い方ができるであろう。iPod を始めとする第二言語の *Mobile Learning* については Chinnery (2006) による報告などがあるものの、その効果についての研究は未だ限られている。本稿は実践報告を目的とするものであるが、今後は言語習得や動機付けなどの観点からも研究が進められることが期待される。尚、デューク大学はインフラ面において恵まれた環境にあったためにこのような試みが可能となったが、本稿で紹介した活動の多くは必ずしも iPod を使用する必要はなく、ラップトップコンピューターや iPod 以外の mp3 プレイヤー、携帯電話*6 などでも代用が可能である点を記しておきたい。

携帯電話を始めとする可動性デジタル機器が普及しその機能が進化していく中、音声や映像ファイルの携帯は益々手軽で一般的になっていくものと思われる。デジタル化時代の日本語教育を考えるにあたり、デューク大学での試みが実践上のヒントならびにさらなる展開のきっかけとなれば幸いである。

【注】

- 1 2007年3月現在、iPod コースを履修している学生は市販価格\$349の第五世代モデルが\$99で購入できる。
- 2 音声の配信をポッドキャスト、映像の配信をビデオキャストとする呼び方もあるが本稿ではその区別は行っていない。
- 3 Japan Times 社からは学期終了後のデータ消去を条件に iPod への取り込みの許可を得た。
- 4 Center for Advanced Language Proficiency Education and Research (www.calper.la.psu.edu) Director の森純子教授にもビデオの iPod 使用につきご快諾をいただいたことにこの場を借りて謝意を表したい。
- 5 現段階では番組の選択肢が限られているとは言え、学生達は各自の興味に合わせてコメディ・方言・昔話・旅行案内等様々な番組を探し視聴していた。尚筆者のコースでは自然なスピードのインプットを増やすという目的で使用したが、学習者自身が番組を制作・配信することも使い方の一つであろう。
- 6 アップル社は2007年6月より iPod 機能付きの携帯電話“iPhone”を発売することを発表している。

参考文献

- 大木 充. (2005). 自律学習と自律学習型 CALL. *MM News*, No.8. 27-32
- Belanger, Yvonne. (2005). Duke University iPod First Year Experience Final Evaluation Report. <http://cit.duke.edu/pdf/ipod_initiative_04_05.pdf>
- Chinnery, George M. (2006). Going to the MALL: Mobile Assisted Language Learning. *Language and Learning & Technology*, 10(1). 9-16.
- Dickinson, Leslie. (1995). Autonomy and Motivation A Literature Review. *System*, 23 (2). 165-174
- Earp, S., Belanger, Y., and O'brien, L. (2006). Duke Digital Initiative End of Year Report. <http://cit.duke.edu/pdf/ipod_initiative_04_05.pdf>
- National Standards in Foreign Language Education. (1999). *Standards for Foreign Language Learning: Preparing for the 21st Century*. <http://www.jppe.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/syllabus/pdf/sy_honyaku_9-2USA.pdf>
- Wagener, Debbie. (2006). Promoting Independent Learning Skills Using Video on Digital Language Learning. *Computer Assisted Language Learning*. 19 (4-5). 279-286